

年少者日本語教育におけることばの教育についての一考察 —JSL の子どもたちのことばの学びの捉えなおしに向けて—

尾関 史

1. はじめに—問題の所在—

外国人児童生徒や帰国児童生徒、国際結婚の子どもなど、国や文化を超えて移動しながら成長を続ける子どもたちが増え続けている。このような子どもたちの抱える問題の中で近年特に、日本語を母語としない子どもや日本語が十分に発達していない子どもたちのことばの教育が深刻な問題となっている。「日本語でやりとりするのは問題がないのに、教室での授業には全然ついていけない」「日本語でも母語でも何がしたいのか良く分からない」「長い時間指導をしているのに、なかなか日本語を話せるようにならない」、これらの問題は子どもたちの教育に関わる人々ならば一度は抱えたことのある悩みだろう。そして、このような問題を解決するための実践および研究はこれまで様々な形でなされてきた。しかし、一方でこのような日本語支援を必要とする子どもたちの問題が学校現場で顕在化して 10 年以上たった今でも、未だに子どもたちのことばの教育の問題は後を経たない。それは一体なぜなのだろうか。川上・池上(2006)は国内外の年少者日本語教育の歴史を概観する中で、これまで様々な形で行われてきた教育を俯瞰的な視点から捉えなおし「年少者日本語教育学」という新たな分野を構築すること、そしてその中で子どもたちに対する言語教育のあり方を探求していくことが求められていると述べている。川上らの指摘は、それぞれの現場で多様な実践が試みられてはいるもののなかなか全体的な制度作りには結びつかず、根本的な問題解決に結びついていない年少者日本語教育の現状を鋭く言い当てている。そしてそのような現状を打破するためには、年少者に対する日本語教育の枠組みを今改めて明確にしていくことが求められているといえる。

そこで、本稿ではこのような問題意識に基づき、年少者日本語教育学の構築に向けて年少者日本語教育のあり方を探っていくことを目的とする。特に、子どもたちにとって大きな壁となっている「ことばの教育」に焦点を当て、子どもたちのことばの教育がこれまでどのような観点で行われてきたのか、またそこで目指されていたのはどのようなことばの力の育成なのかという点からこれまでの年少者日本語教育を概観したい。そして、その上で今後年少者日本語教育におけることばの教育はどこに向かっていくのかについて筆者の考えを述べる。

2. JSL の子どもたちのことばの発達

2-1. 子どもとことば

そもそも、子どもたちにとって「ことば」とはどのような意味を持ち、どのような役

割を果たすものなのだろうか。本稿で対象とする JSL の子どもたち¹のことばの問題に入る前に、まずは子どもとことばの関係について光を当ててみたい。

岡本(1982)は、子どもたちがことばを発達させていく過程を発達心理学の見地から詳細に追い、ことばの発達はその単独に進むのではなく子どもたちの様々な成長や発達と共にあるものだと述べる。つまり、ことばの発達と共にそのことばをもとにして思考や成長が促され、人間としての発達、成長につながっていく。そして、それが子どもたちの意味世界を広げていくことにもつながっていくというのである。そのような意味で、子どもにとってことばと発達は切り離すことの出来ない重要な関係にあり、「ことばの発達」ではなく「発達の中のことば」とも表せるほどだと説いている。さらに、このような発達の要となることばを発達させる際、子どもは周囲や外からの刺激をそのまま受け入れ覚えていくのではなく、自らの能動的な活動を通して刺激を内化していくといい、この能動的な内化の過程こそが発達だという。このような岡本の指摘から、ことばが子どもたちの成長にとって重要な位置を占めていることがわかる。それゆえ、子どもたちの発達を語る上でことばという観点を抜きにして語ることは不可能であり、逆もまた同様であろう。つまり、子どもたちのことばは発達に結びつく重要なものであり、子どもたちのことばの教育には発達の視点を欠くことは出来ないのである。これが、成人に対する日本語教育と年少者に対する日本語教育が大きく異なっている点の一つである。

一方、日本語母語話者の子どもたちにとって、このような発達を支えることばの育成は学校教育のカリキュラムの中で保障されている。現存の小学校および中学校の学習指導要領ではこのような発達観に基づいたカリキュラムが組まれており、それらに基づいた公教育を受けることで自然と子どもたちのことばの発達、ひいては人としての発達が保障されているのである。しかし、JSL の子どもたちは日本語力が不十分なことからこの学校教育の場に十分に参加していけず、そこで育成されるべきことばの発達も十分に望めないことが多い。さらに、さまざまな要因が子どもたちのことばの発達を妨げている。そこで次節では、このような JSL の子どもたちのことばの現状について考えたい。

2-2. JSL の子どもたちとことば

2-2-1. ことばの背景の多様性

「JSL の子どもたちのことば」と一口にいてもその背景は非常に多様である。例えば、子どもたちの母語あるいは得意なことばとは韓国語であるのか中国語であるのか、はたまた英語であるのか、またその複数であるのかといった「言語背景の違い」、そしてそれぞれの言語で何がどの程度出来るのかという「言語能力の発達の違い」がある。また、家庭では母語を使うのか日本語を使うのか、学校ではどんなことばを使うのか、

¹ 本稿における「JSL の子どもたち」とは、従来の定義である日本語を母語としない子どもたち (Japanese as a Second Language) だけではなく、日本語を母語としながらも日本語が不十分である子どもたちも含むこととする。つまり「日本語指導が必要な子どもたち」全般をその対象として含んでいる。

地域ではどんなことばを使うのかといった「言語環境の違い」もあるだろう。さらに、母国（あるいは外国）でどの程度の言語教育を受けてきたのかという「言語教育背景の違い」もある。つまり、JSL の子どもたちのことばといっても、その背景は非常に多様なのである。日本語を母語とし、生まれたときから日本語のみの環境で育つ場合が大半を占める日本人の子どもの場合と比べてみると、その多様性は顕著だろう。そして、このような背景の多様さが日本の学校教育という一律のカリキュラムの中で子どもたちのことばの発達を保障することの難しさにつながっている。

2-2-2. 移動によることばの発達の分断

一方、子どもたちのことばの発達は彼らが国や地域を越えて移動を繰り返す間にも常に進行している。それゆえ、来日したことでそれまでの母国（外国）での学びが中断してしまったり、それまでの母語（もしくは強いことば）の発達が分断されてしまう恐れがある。そもそも、子どもたちのことばの発達は日本語としてのことばの力だけではなく、母語であるもう一つ（ないしは複数）のことばの力の発達をも含んでいる。つまり、子どもたちのことばの力は双方（複数）のことばに関連を持ちながら発達を続けているのである。そのため、一方（または双方）の言語において発達が滞ることは子どもたちのその他様々な発達にとっても悪い影響を及ぼしかねない。実際に、低年齢で母語が未発達のまま来日し日本語でも十分なことばの力を持たない子どもたちが双方の言語において発達が停滞してしまう「ダブルリミテッド」という深刻な状態も報告されている²。前述したように、ことばの発達が子どもたちの人間としての発達の中で必要不可欠な要素であることを考えると、このようなことばの発達の停滞は子どもたちにとって深刻な問題である。さらに、ことばの発達の遅れだけでなく、ことばが壁となり自分の言いたいことを十分に伝えられないために自己表現の機会が限られてしまうという問題も見られる。そして、このようなことが重なる中で子どもたちが自分に自身を失い、アイデンティティを喪失してしまうという事態をも招きかねない。

このように、JSL の子どもたちのことばは継続した発達が保障されにくい環境にある。その結果、前述したようなダブルリミテッドという状態に陥ったり、ことばが話せたとしても年齢相応の認知的発達が果たされないなど、様々な側面において影響が見られる。つまり、「ことばの発達」が停滞することでその他様々な成長、発達の停滞へとつながっていく恐れがあるのである。では、このような子どもたちのことばの発達を保障するために年少者日本語教育は何が出来るのだろうか。次章では、年少者日本語教育におけることばの教育に注目し、これまでの実践および研究を振り返りたい。

²母語・継承語・バイリンガル教育研究会第7回研究集会「ダブルリミテッド／一時的セミリンガル現象を考える」（2006年2月18日）

3. JSL の子どもたちのことばの教育

本章では、年少者日本語教育においてこれまで行われてきた実践および研究を振り返る中で、子どもたちのことばの教育がどのように捉えられ、どのような実践が行われてきたのか、そしてそれは子どもたちのことばの発達とどのように関係しているのかを概観する。なお、本章では親の仕事の都合などで来日したいいわゆるニューカマーの子どもたちへの教育を対象とし、彼らの問題が顕在化しその具体的な教育方策が考えられ始めた 1990 年代後半以降の実践研究を対象とする。

3-1. JSL の子どもたちのことばの教育の変遷

川上・池上(2006)はこれまでの年少者日本語教育の歴史を振り返り、1980 年代から学校現場でこのような JSL の子どもたちの受入が始まり、それに伴い、各学校現場や教育委員会で「外国人児童生徒受入の手引き」や手作りの日本語教材が作られたと述べている。続く 1990 年代ごろからは JSL の子どもたちに対する本格的な実態調査や初期指導が行われ始め、指導の理論化、体系化が試みられた(岡崎 1995、西原 1996)。そして、このような理論化、体系化の動きの一方で子どもたちの教科指導の方法が模索され始めたという。また、池上(1998)では 1990 年代以降の年少者日本語教育の傾向を概観し、年少者日本語教育におけることばの教育の傾向として①学習言語を意識した日本語教育、②教科学習と連動した日本語教育、③母語指導、母語保持を視野に入れた日本語教育、の 3 点を挙げている。

これらの指摘に見られるように、JSL の子どもたちに対する実践および研究が進む中で、子どもたちのことばの力には文脈の助けが多い日常的なやりとりに使われる言語能力(BICS)と、認知的負荷の高い場面や抽象度の高い内容でのやりとりの際に使用される言語能力(CALP)という二つの異なる発達の段階があるということが研究者および子どもたちに関する支援者達の間で広く知られるようになった。そして、習得の難しい CALP いわゆる「学習言語能力」をいかに身につけさせるかということに注目が置かれるようになり、学校での学習に参加できない子どもたちに対し学習言語能力をつけるための試みが様々に行われ始める。その代表的な研究として、内容重視のアプローチによる「教科と日本語の統合教育」(齋藤 1999,2000)の実践や、母語を活用して内容重視のアプローチを行うという「教科・母語・日本語相互育成学習」(岡崎 1997)の考え方に基づく清田(2004)、朱(2003)の実践、また算数文章題の読解ストラテジーを明らかにした矢崎(1999)などがある。次節では、それぞれについて簡単に概要を述べる。

3-2. 教科学習への参加を目指したことばの教育

齋藤(1999)では、JSL の子どもたちにとって参加が難しいとされる教科学習への参加を可能にする手立てとして、教科学習の内容と日本語学習の統合を試みる「内容重視アプローチ」を紹介している。そして、この内容重視アプローチの実践により、①コミュニケーションに必要な能力の育成、②教科との統合により認知的学力的側面を支える日

本語力、学習言語能力の育成が可能になると述べている。また、斉藤(2000)では実際に内容重視アプローチに基づいた授業実践が紹介され、日本語と教科の統合学習が言語学習の場としても教科学習の場としても効果的な役割を果たすことを明らかにしている。そして、このような教科と日本語の統合学習を通して、学習言語能力としてのことばの力の伸長が期待できると指摘する。

清田(2004)では、内容重視アプローチの考え方を背景にし、子どもたちの持つ母語の力を活用する「教科・母語・日本語相互育成学習モデル(以下：教科・母語・日本語モデル)(岡崎 1997)」による支援を行っている。このモデルでは子どもたちの母語の力を活かしながら支援を行うことで、教科学習支援を軸とした母語と日本語の相互の育成が目指されている。清田(2004)は教科・母語・日本語モデルのアプローチが学習者の内容理解にどのように貢献できるのかを検討し、その結果、学年相応の教材の内容理解が促されたことを明らかにしている。また、母語を活用した学習支援が学習内容の継続性、能力面の継続性、学習環境の継続性を保証するという可能性を示している。さらに、朱(2003)では中国人児童に対して教科・母語・日本語モデルを活用した教科学習支援を試みている。在籍学級で使用される教材文の訳文を作成し、支援者である朱自身が母語を活用した先行学習の支援を行っている。支援を通して、教科の内容理解を可能にし、それをテコとして学習言語としての日本語を理解可能にすること、また同時に日本語力を向上させていくことが目指されている。そして、このような支援の結果、教科学習への参加を促進する資源の一つとしての母語の有効性が見られたという。

一方、矢崎(1999)では子どもたちが「いかに教科学習についていけるだけの日本語力をつけていくか」という目標を掲げ、外国人児童が算数の文章題を解く際に使われるストラテジーを明らかにしている。そして、それらのストラテジーを意識的にトレーニングしていくことで教科学習の参加へとつなげていくことを提案している。

3-3. 教科学習への参加を目指した支援の課題

このように、子どもたちの教科学習への参加を目指したことばの教育に向けて、これまで様々な実践および研究が積み重ねられてきた。そして、これらの実践研究により、子どもたちの学習への参加に改善が見られるようになってきているのは事実である。しかし、一方で課題も多い。その一つとして、日本人と同等の参加をしていくためのことばの発達（いわゆる学習言語の発達）には5～7年という長い年月が必要とされるため、なかなか同等の参加が果たされず、学習活動で求められている年齢相応の認知的な発達は十分に望めないという現状がある。それゆえ、子どもの認知的発達を満たすだけのことばの発達が保障されにくいという難しさがあるのである。また、冒頭でも述べたようにこのような支援が行われているにも関わらず、子どもたちの学力の問題、ことばの問題は依然として山積みであり、むしろ一層深刻化を増している。それはなぜなのだろうか。筆者はそこに JSL の子どもならではのことばの学びの視点が欠落しているためだと考え

ている。具体的に言うならば、これまでの年少者日本語教育の実践を改めて振り返ってみると、そこには在籍学級において日本人と同等に教科学習へ参加を果たしていくためにいかに支援をしていくかという視点での実践が多い。子どもたちにとって在籍学級で他の子どもたちと同じように教科学習に参加していくことは、もちろん心理的な面でも認知的な発達においても重要なことである。しかし一方で、日本人と同様の参加という目標を掲げることで、JSL の子どもにとっての学習が日本人と比べてどこまで学習できたか、またどのようにして日本人に追いつくのかという、常に日本人に追いつくための後追いの学習になりかねない。そしてそのような学習は、JSL の子どもにとって心理的にも大きな負担となり得る。それゆえ、従来の日本人のための枠組みの中で、そこにいかに適応させていくのかという議論ではなく、JSL の子どもならではのことばの力とはどのようなものであり、どのようなことを目指していくのか、そしてどのようにその力を育成し、どのように評価していくのかという、新しい枠組みでの議論が求められていると考える。

前掲の池上(1998)はこれまでの年少者日本語教育を概観した上で、従来の「日本語教育」「学校教育」という枠内だけで課題やその解決の方略を考えていたのでは実践は理念にとうてい追いつけないと当時の年少者日本語教育の抱える課題を指摘している。しかし、このような問題提起がなされてから 10 年近くたった今でもその問題は解決されているとは言いがたい。それは、前掲の川上・池上(2006)において、今後の年少者日本語教育に求められる課題として「日本語指導が必要な子どもたち」の教育とはどのような教育哲学をもつ教育なのかという課題こそがもっとも重要な研究主題である (p.59) と示されていることから明らかである。では、JSL の子どもならではのことばの教育の視点とはどのようなものなのであろうか。それは決してこれまでの教科に注目した支援や母語を活かした支援を否定するものではない。池上(1998)では、多くの支援現場で CALP 習得の重要性が広く言われているものの実際にその「正体」はそれほど判然としていないとし、教科学習の領域で用いられる語彙表現は CALP を活性化するのに必要な「部品」であり、非常に重要ではあるが、それだけでは十分ではないのではないかと続けている。つまり、教科学習や母語を一つの「部品」と考えながらも、その部品を使ってそこで子どもたちにどのようなことばの力を育てていくのかという議論が求められているのである。次章では、このような問題意識を持ちながら、JSL の子どもならではのことばの学びのあり方についてより詳しく考えていきたい。

4. JSL の子どもならではのことばの学びへ

前章では、JSL の子どもならではのことばの学びを考えていくことの重要性を述べた。では、実際に JSL の子どもにとってのことばの学びを支援する上で重要なことはどのようなことだろうか。本章では、「子ども自身への注目」「教科学習の中でのことばの学びへの注目」「発達を支えることばの力への注目」という 3 点を挙げ考察していく。

4-1. 子ども自身への注目

これまでの年少者日本語教育研究および実践の多くは、教師側からどのような支援をどのような教材を使ってどのような方法で与えることが子どもの学びに有効であるのかという議論がほとんどであった。しかし、一方で教師が考えたアプローチが必ずしも上手く行くわけではないということは多くの支援者が経験していることであろう。それはなぜなのだろうか。それは子どもたちが単に知識を詰め込まれるという受身的な存在として学習をしているからではないからである。子どもたちは私達大人が考える以上に能動的に主体的にことばを学んでいるのである。

4-1-1. 学習観の転換—学習者の主体性への注目

近年、認知心理学や教育学を始めとする様々な分野において学習観の転換が言われるようになってきている。そこでの「学習」とは、単に学習者の空っぽの頭に知識を詰め込むことではなく、学習者という主体が外の環境と主体的にやりとりをする中で学びが起こるという考え方に基づいている。それゆえ、学びに対する学習者の主体的な関わりが重視され始めている（佐藤 1996、佐伯 1995、石黒 2004 など）。成人に対する日本語教育の分野においても学習パラダイムの転換が起こっている。従来までの学習者に何を、どう教えたらいのかという教師自身の教え方への注目から、学習者の学びをどう引き出すか、学習者が自律的に学ぶにはどのような支援が必要かといった観点、つまり学習者にとっての日本語の位置づけや意味を考えるような日本語教育のあり方が注目されて始めている（舘岡 2007）。それに伴い、学習者オートノミー、自律的学習と言うキーワードが多く聞かれ、学習者自身に注目した学習のあり方も模索され始めている（桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」編 2007）。

4-1-2. 子どもの主体性に注目した年少者日本語教育

年少者日本語教育の分野でも、このような子ども自身の主体的な関りに注目している実践が見られる。齋藤(2006a,b)は、JSL 児童生徒の成長は環境に自分を同化させていくといった従来の異文化適応の視野では捉えきれず、当事者である子どもたち自身が学校や社会の中で自分の立ち位置を確認しながら自分の将来を見出し、学びを深めていくことだと指摘する。つまり、子どもたちのことばの学びを考える際、そこで子どもがことばを使って何を実現しているのか、どのように自分の世界を広げているのかという子ども自身の主体的な変容過程に注目していくことが必要だという。

実際に、このような子どもの主体性に注目して行われた支援の一つとして尾関(2007)がある。尾関(2007)では、日本語がほとんど話せない状態で日本にやってきた外国人児童に対し子どもの主体性に寄り添った学習支援を試みている。そこでは、学校での教科学習になかなか積極的に取り組もうとしなかった子どもが、自分が主体的に関れる手紙を書くという活動を通して学びへの自信と積極的な姿勢を獲得し、学校の教室での学習場面において自分の考えを主体的に示そうとするまでに成長していく姿が報告されている。これは、子どもにじっくりと向き合いながら子ども自身の主体的な学びに注目し、

子どもとやりとりを繰り返す中で自己表現のためのことばを育てていった結果であると言えるのではないだろうか。また、このような子ども自身に注目し、子どもの主体性に寄り添い、やりとりを繰り返す中でことばの力を育てていくという視点は、日本社会で自己表現の機会を見つけることの難しい子どもたちの精神面においても重要な支えとなる可能性を持つものである。

4-2. 教科学習の中でのことばの使い方への注目

一方で、子どもたちにとって学校での教科学習は外すことの出来ない文脈である。それは子どもたちにとって精神的な面においても認知的な面においても、在籍学級における教科学習への参加が重要な役割を果たしているからである。しかしそこで重要となるのは、「教科学習をいかに学ばせるのか」ではなく、「教科学習の中でいかに学ばせるか」ということではないだろうか。つまり、単に教科の知識をどのように効率的に入れるのかではなく、その学びの中で JSL の子どもにとって必要な学びの力をいかにつけていくかが重要である。言い換えれば、学校での教科学習の場面で子どもたちがことばを使って何を学んでいくのかということに注目した実践が必要だと考える。

4-2-1. JSL カリキュラム小学校編にみる「ことばの力」

前掲の「内容重視のアプローチによる教科と日本語の統合教育」(齋藤 1999,2000)においても、このような考え方は示されている。齋藤(1999)は内容重視のアプローチを通して、①学校の授業や活動という子どもたちにとって意味のある学習の場において「日本語を使って何を出来るようにするのか」、②学習言語能力の発達と学力の向上を目指す、という二つの目標を掲げている。しかし、実際にそれをどう具現化していくのかという面では、今後の実践に期待する部分が多いとされている。また、この内容重視の考え方をもとに行われたアプローチはこれまでも少なくないが(前掲の清田 2004、朱 2003 など)、いずれも内容重視アプローチを用いることで教科学習の内容理解が進んだという議論に終始しており、そこで「日本語を使って何を出来るようにするのか」という面での議論は深まっていないように感じられる。JSL の子どもたちにとって教科学習の内容の理解はもちろん重要なことではあるが、それだけではなく、そこでことばを使って何をするのか、つまり学習のためのことばの力をどうつけていくのかということが更に重要なのである。

このような内容重視アプローチの考え方は、その後文部科学省が発表した「JSL カリキュラム」の理念にも引き継がれている。JSL カリキュラム小学校編「国語科」を例に取り上げてみよう。JSL 国語科には JSL の子どもたちの抱える問題として、「相手に自らの考えや意見・気持ちをわかりやすく伝えられない」「相手の考えや意見・気持ちを十分に理解出来ない」「相手とのやり取りをとおして、自らの考えや意見を見直して向上・改善させることができない」が挙げられている。そして、これらの困難を克服するために「伝え合う力」を身につけるための「学ぶ力」が目標として掲げられている。

ここで目指されている力とは単に日本語の知識や技能ではなく、実際の場面で子どもたちにとって意味を持つ内容についてはたらくことばの力を育むことである。そして、そのために「伝え合う力」を身につけるための「学ぶ力」（他者との関係を通して意味世界を広げることや、成長・発達を支えるための力）と、言語活動に参加するための言語事項や語彙にかかわる「学ぶ力」（正しく理解し、表現するための言語事項）を身につけることが目指されている。つまり、言い換えるならば、教科学習という場を通して自分を表現し、他者と関係を結び、その中で自分の意味世界を広げていくことが子どもたちの成長や発達につながっていくと考え、それを可能にするための「ことばの力」を育てていこうとしているのである。なお、これは4-1.で前述した子ども自身の主体性に注目し、子どもが自分を表現するためのことばの力を支援していくという方向性とも重なる部分が多い。

4-2-2. JSL カリキュラムの実践—「伝え合う」ためのことばの力

このような JSL カリキュラムの考え方を実際に教科学習の場面で実践したものと、近田(2007)や竹下・石田(2007)などが見られる。いずれも学習を通して JSL の子どもたちが意欲的に目的意識を持って学習に取り組んだこと、また、自分なりの考えをことばを使って伝えたり話したりすることができたこと、友だちの考えに関連して自分の発言をするようになったなどの成果が見られたという。つまり、学習を通してことばが自分の考えを伝えるため、また友だちの考えを聞いて自分の意見を捉えなおすための「道具」として働いていることがわかる。このようなことばの力は子どもたちが教科学習に参加していく際にはもちろん、子どもたちが学校を卒業して社会に出た後にも必要となることばの力である。また、このようなことばの使用を通して、子どもたちは自分の意見や考えを伝える媒介としてのことばの使い方を知り、それにより自己表現の場が広がっていくことが予想される。日本語が不十分であることにより自己表現の機会を狭められ、自分に自信をなくしていくことの多い JSL の子どもたちにとって、このようなことばを使った自己表現の機会が増えていくことは、大きな意味を持つ。そして、このような自己表現を繰り返す中で参加の場面を広げていくことが、子どもたちの日本社会における自己実現にもつながっていくのではないだろうか。

また、このような実践を通して、子どもたちのことばの発達や学びは子どもたち自身のみで成り立っているわけではないことが分かる。子どもたちのことばの発達は、子どもたちがことばを周囲の他者や環境に向けて意味のあるものとして使用する中でなされていることがうかがえる。つまり、ことばの発達とは子ども自身の主体性に注目しながらも、その主体性を生かし、周囲とのやり取りの中で発達を遂げていくものなのである。それゆえ、周囲人々の存在、また周囲の環境や文脈の存在が重要な意味を持つ。そのやりとりのための意味のある文脈の一つとして、ここで述べた教科学習の場面が多いに活用できるのである。つまり、単に知識としてことばを教えていくのではなく、意味のある文脈の中でことばを使って自分について発信し、他者、周囲との関係を築いて

いくことが、学ぶ力の発達、ひいては人間としての発達につながっていくといえる。

4-3. 発達を支えることばの力への注目

また三つ目の観点として、発達を支えることばの力への注目がある。2章で前述したように、子どもたちにとってことばの力は発達を支える要となっている。それゆえ、子どもたちのことばの力を発達の観点から捉えなおすことが求められている。ことばの教育を通していわゆる言語知識だけでなくそれ以外の広い意味での能力を同時に発達させていくことは、発達途上にあるJSLのこどもたちの発達にとって大きな意味を持つ。石井(2006)は年少者日本語教育は「人としての成長の発達の過程にあるものの言語習得」であることを忘れてはならないとし、一人ひとりの子どもの日々の生活およびこれからの人生にどのような力が必要で、どれに日本語教育がどう貢献できるのかと考えていく必要があると指摘する。このような子どもの過去・現在・未来という人生を視野に入れた長期的視野に立つと、子どもたちのことばの学びはいわゆる日本語能力といった観点を超えた子どもの発達にとってどのような支えとなるのかという観点から捉えなおされる必要がある。ここでは、ことばの力を発達の観点から捉えている「自己学習能力」「コミュニケーション能力」「メタ認知能力」の例を出しながら考えていく。

4-3-1. 子どもたちの発達を支えることばの力

野山他(2006)は、これまで年少者日本語教育研究において注目されてきた学習言語能力や学習能力に加え、子どもたちが自らの学習を管理する「自己学習能力」(波多野 1980)に注目している。そして、日本語を学ぶことが自分の将来にどうつながっていくのかということを、ライフステージの各段階において子ども自身が捉えなおし、学習の動機付けを自分自身で明確化し、自己管理できる力を育てていくことが重要だと指摘する。そしてその際、他の学習者と共に学ぶ協調学習(collaborative learning)の方法が有効だとし、他者との対話を通して自分自身のことばの使用を見つめなおしていくことがことばの発達につながっていくとしている。また、それらの対話を通して人との関係を作る方法を学んでいくことも可能であるという。つまり、このようなことばの力は4-2で前述した人と関係を作るためのことばの力とも深い関連を持っている。しかし一方で、低年齢の子どもの場合はメタ認知能力が十分に発達していないために「学び方」を自覚することが困難であること、また対話に参加するためのことばの力が不足しているという課題も指摘されている。

また、石井他(2007)は、これまで習得が目指されてきた学習言語能力を支えるために、他者との関係を結ぶ「コミュニケーション能力」、学習活動によって獲得された知識や言語を体系化するための「メタ認知能力」が重要な役割を果たすことを指摘し、ことばの教育にあたってこれらの力を共に育てていくことが必要だとする。また、このようなことばの力は、大学生の留学生への教育において目指されているアカデミックジャパニーズで目指されていることばの力にも通ずる力だという。つまり、子どもから大人まで

の長期的な発達のスパンの中で生きてくることばの力なのである。

5. おわりに—年少者日本語教育におけることばの教育の構築に向けて—

4章では JSL の子ども独自のことばの学びの指標作りとそれに向けた教育体制作りが求められていることを指摘し、その具体的な方向性について3つの観点を挙げ論じた。最後に、そのような年少者日本語教育におけることばの教育を進めていく上での課題とその克服の可能性について述べ、本稿のまとめとしたい。

前述したような JSL の子どもならではのことばの学びに注目した実践は緒についたばかりである。そのため、このような実践に対する課題も多い。齋藤(2007)では、4-2.で紹介した JSL カリキュラムの普及に向けて三点の課題をまとめている。それぞれ、①現場の教育体制や人材育成制度の未整備という制度上の問題、②担当教員の多くが日本語教育の専門性に乏しいという問題、③JSL の子どもの日本語力を把握するための指標が無いという問題である。そしてこれは、年少者日本語教育におけることばの教育を進めていく上でも多くの点で共通する指摘であろう。

では、このような課題を克服していくためにはどうすればよいのだろうか。実際、それらの課題を克服していくための実践および研究も既に行われ始めている。例えば、従来の教員養成プログラムの中に JSL の子どもを指導するためのカリキュラムを組み込んでいく必要性を主張した川上(2001)や、JSL の子どもたちのことばの教育を担当する教員に対してその専門技量を高めるための初任者研修の試みがそれにあたる。また、子どもたちの日本語力を把握するための指標作りとして、子どもたちのことばの力を子どもたちの実際の言語使用の場面に基づいて動的に把握することを目指した JSL バンドスケールの開発(川上 2003,2007)の研究も積み重ねられている。今後はこのような実践、研究を充実させていくと同時に、それらの実践研究から得られた知見をもとに年少者日本語教育におけることばの教育のあり方についての議論をさらに深め、年少者日本語教育学を確立していくことが求められる。本稿がそのような年少者日本語教育におけることばの教育の構築に向けた一つの提案となることを願っている。

【参考文献】

- 池上摩希子(1998)「児童生徒に対する日本語教育の課題・再検討-研究ノート」『中国帰国者孤児定着促進センター紀要』6, pp.131-146.
- 石井恵理子(2006)「年少者日本語教育の構築に向けて—子どもの成長を支える言語教育として—」『日本語教育』128, pp.3-12.
- 石井恵理子・齋藤ひろみ・門倉正美・川上郁雄(2007)「年少者日本語教育における「JSL カリキュラム」とリテラシー教育」『2007年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.329-340.

- 石黒広昭(2004)「学習活動の理解と変革に向けて：学習概念の社会文化的拡張」 石黒広昭
編著(2004)『社会文化的アプローチの実際—学習活動の理解と変革のエスノグラフィ—』北大路書房 pp.2-32.
- 桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」編著(2007)『自律を目指すことばの学習—さくら先生のチュートリアル—』凡人社
- 岡崎敏雄(1995)「年少者日本語教育研究の再構成—年少者日本語教育の視点から」『日本語教育』86,pp.1-12.
- 岡崎敏雄(1997)「日本語・母語相互育成学習のねらい」『平成八年度外国人児童生徒指導資料母国語による学習のための教材』茨城県教育庁指導課,pp.1-7.
- 岡本夏木(1982)『子どもとことば』岩波新書
- 尾関史(2007)「主体的な自己実現を目指す年少者日本語教育に向けて—ある外国人児童への日本語支援からの気づき—」『早稲田日本語教育学』1, pp.11-23.
- 川上郁雄(2001)「「年少者のための日本語教育」が教員養成系大学・学部に必要な理由」『宮城教育大学紀要』36,pp.1-13.
- 川上郁雄(2003)「年少者日本語教育における「日本語能力測定」に関する観点と方法」『早稲田日本語教育研究』2,pp.1-16.
- 川上郁雄(2007)「日本語能力の把握から実践への道すじ—「J S Lバンドスケール」の意義と有効性」『国際研究集会「移動する子どもたち」の言語教育—E S LとJ S Lの教育実践から—予稿集』 pp.166-187.
- 川上郁雄・池上摩希子(2006)「年少者日本語教育の歴史と展望」早稲田大学大学院日本語教育研究科編(2006)『早稲田日本語教育の歴史と展望』 pp.47-73.
- 清田淳子(2003)「母語を活用した内容重視のアプローチの試み—来日直後の外国人児童を対象に—」『人間文化論叢』6,pp199-210.
- 近田由紀子(2007)「学校現場からの実践報告：大瀬小学校におけるJSLカリキュラムの実践—JSLカリキュラム2年国語科「あったらいいなこんなもの」」『国際研究集会「移動する子どもたち」の言語教育—E S LとJ S Lの教育実践から—予稿集』 pp.246-263.
- 齋藤ひろみ(1999)「教科と日本語の統合教育の可能性—内容重視のアプローチを年少者日本語教育にどのように応用するか—」『中国帰国者孤児定着促進センター紀要』7, pp.70-92.
- 齋藤ひろみ(2000)「帰国児童・生徒クラスの「日本語と教科の統合学習」における教室会話の分析」『中国帰国者孤児定着促進センター紀要』8, pp.70-93.
- 齋藤ひろみ(2007)「「学習参加のためのことばの力」を育む—文部科学省開発「JSLカリキュラム」の方法論とその実践事例から」『国際研究集会「移動する子どもたち」の言語教育—E S LとJ S Lの教育実践から—予稿集』 pp90-121.
- 齋藤恵(2006a)「適応支援としての年少者日本語教育の役割と課題—J S L児童生徒の「行

- 為主体性」をどう捉えるか—』『早稲田大学日本語教育研究』8, pp.37-50.
- 齋藤恵(2006b)「JSL 児童生徒の成長における「audibility」と「行為主体性」の意味—子どもの成長を支援する言語教育のために—」『リテラシーズ 2』 pp.113-128.
- 佐伯胖(1995)「文化的実践への参加としての学習」佐伯胖・藤田英典・佐藤学編(1995)『学びへの誘い』東京大学出版会 pp.1-48.
- 佐藤公治(1996)『認知心理学から見た読みの世界—対話と協同的学習をめざして』北大路書房
- 佐藤郡衛・今澤悌・齋藤ひろみ・池上摩希子(2005)『外国人児童の「教科と日本語」シリーズ 小学校「JSL 国語科」の授業作り』スリーエーネットワーク
- 朱桂栄(2003)「教科学習における母語の役割—来日間もない中国人児童の「国語」学習の場合—」『日本語教育』119, pp.75-84.
- 竹下譲・石田裕美(2007)「いちょう小学校のことばを育む教育—外国につながる子どもたちの学びを支える」『国際研究集会「移動する子どもたち」の言語教育—ESLとJSLの教育実践から—予稿集』 pp.264-284.
- 舘岡洋子(2007)「ピア・ラーニングとは」池田玲子・舘岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために—』ひつじ書房 pp.35-69
- 西原鈴子(1996)「外国人児童生徒のための日本語教育のあり方」『日本語学』15, pp.67-74.
- 野山広・三宅なほみ・池上摩希子・石井恵理子(2006)「多言語環境下にある子どもの「学習能力」—年少者日本語教育学の観点から—」『2006年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp.273-284.
- 波多野誼余夫(1980)『自己学習能力を育てる—学校の新しい役割』東京大学出版会
- 矢崎満夫(1999)「外国人児童に対する教科学習支援のための日本語教育のあり方—算数文章題におけるストラテジー運用の考察から—」『日本語教育』99, pp.84-95.